

第11回 山のトイレを考えるフォーラム議事抄録

山のトイレを考える会

平成21年3月6日(土) 14時00分～17時30分
北海道大学学術交流会館「1階第一会議室」 参加者：47名
テーマ：改めて北海道の山トイレ事情の今

1. 開会挨拶 司会 小枝正人

2. 代表挨拶 岩村和彦

私は前から山のトイレは何とかならないかと思いつけていたが、2000年に初代の代表・横須賀の講演会があり聞きに行きまして、それで有志5、6名が会を立ち上げました。その年に札幌市教育文化会館で第1回フォーラムが開催されました。

果して北海道の山が私たちの活動で、どのくらい良くなったのだろうか、それぞれ皆さんの判断があろうかと思えます。全然進んでいないのではないかと言われれば、返す言葉がありませんが、私から見ると相当マナーの面は向上してきたのは事実かなと思えます。

誰でも休憩する地点は同じですが、ちょっと横に入ると見たくもないティッシュが残置されているのが見受けられます。その点では我々の活動が、まだまだ認知されておらず、基本的マナーの部分がまだ完全に定着していないと認識しています。

この会を立ち上げてから、いろいろな活動をしてきています。全員とも専任でやっている訳でなく、それぞれ仕事を持ちながら活動していますので、皆さんから見ると、やる事が遅いと感じることがあるかも知れません。その点の批判は甘んじて受けたいと思えますが、多少、その辺の所をお汲みいただけたらと思えます。

今回のテーマを「改めて北海道の山トイレ事情の今」としました。北海道にある山小屋のトイレ環境、トイレ事情はどうなっているのか、みんなで意見交換して一緒に考えたいと思えます。

これに先立ちまして、総会を開催させていただきました。活動報告、会計報告等、承認いただきましたことをご報告させていただきます。

3. 2009活動報告 仲俣善雄 内容は第11回フォーラム資料集2～4ページを参照願います

4. 各山城の山トイレ事情報告

(4-1) 大雪・十勝 黒澤大助(山のトイレを考える会)

[質疑応答]

(山のエコー：上) 白雲、忠別、上ホロ小屋のポットトイレは臭いが少ない。それに比較しヒサゴ小屋のトイレは臭いが凄い。何が違うのでしょうか。

(黒澤) 素人目にはよく分からないが、換気の違いではないかと思えます。ヒサゴは空気の流れが悪い。

(愛甲) 私の推測ですけど、周りの水の関係かも知れない。ヒサゴのトイレは沼の畔に建っているの、地下水位の影響や、便槽の構造そのものかもしれません。詳細は分からないですけど。

(4-2) 知床羅白岳 滝澤大徳氏(知床山考舎)

[質疑応答]

(横須賀) 知床の普及啓発とか維持管理とかの役割分担が環境省、北海道、斜里町等となっていて、民間人が入っていない。やはり民間が入らないと一般登山者の利用の感覚だとか、このようにすればもっと啓発できるとかのアイデアが盛り込まれないと思うのですが、民間人を入れるような方向性はあるのでしょうか。

(滝澤) まさに私が言いたかったのはそこです。本当にちょっと間違えると、ちぐはぐな押し付け的な方法になってしまうのではないかと。実際に町内で携帯トイレの販売をお願いされた所は、なんでこんな物を買わなければならないのか、自分達が今まで扱ったことのない物、使い方も知らないの、相当反発がありました。これに関しては、さきほどの役割分担での仕事ですが、どうしても顔をあわせるのが私なものですから、私にガンガンくる訳です。いやいや、そうではないんだヨ、携帯トイレとはこういうもので、こう使う、回収ボックスはこういうものとか説明しなければならぬ。押し付け的なものにならないようにするためにも、いろいろ細

かい部分を吸い上げて欲しいなあ。それで行政だけでやっている集まりを、次年度にでも何か協議会的な組織を作りたいとの意向があります。ただ、協議会になると偉い人だけの集まりになってしまう懸念もありますね。そうすると実行力が無いので、協議会でなくて、もうちょっと連絡だとか連携だとか、し易いものに出るのが良いと、話をしてきました。ただ、なかなか行政というのは、1項目、1項目ずつやっていきたいと言う部分があって、協議会にならざるを得ないのかなと言っていました。実際、知床は会議が多過ぎるんです。世界遺産になってから、もの凄い数の会議があって、殆ど同じメンバーの顔ぶれで、会議の名前だけ違うというのが沢山ある。組織を作ったらそれに我々も出させていたいただきたいと考えています。

(参加者) 携帯トイレが放置されていた例はありますか。

(滝澤) あります。私も一個回収したことがある。殆どないがゼロではない。

(4-3) 利尻山 岡田伸也氏 (環境省利尻アクティブレンジャー)

[質疑応答]

(仲俣) 携帯トイレの回収率が60%前後と高いのですが、女性は大便と小便、男性は小便は外で、大便が主になるのですか

(岡田) やはり女性は大便も小便も利用され、回収率が高い。男性はアンケートでも小便は使わない人が多かったです。

(上) 若い人が登山に戻ってきている。問題は若い人は地図を持たない、自分がどこにいるか分からず遭難に繋がる。トイレの使い方、排泄の仕方を全く考えていない人ばかりが増えてきている可能性がある。

(岩手大学農学部：柴崎) 屋久島について研究している。島の特有性が紹介されて、利尻島の事例が羨ましく思えたのですが、屋久島のコミュニティは閉鎖的な感じがして、なかなか自由に意見が言えない現状がある。利尻島は自由にもものが言える雰囲気なのだろうか。携帯トイレも反発があったと思うが、自分の仕事に組み入れており前向きですね。どうい話し合いが行われ合意したのか。屋久島も去年から携帯トイレを導入しているのですが、協議会は非公開。ガイド部会とか観光協会とかで簡単に紹介されるけど、具体的にどうやって携帯トイレを普及していったらよいかという根本的な議論をガイドさんとか宿泊業者さんとか意見を言っても反映されない仕組みで島全体として盛り上がらない状況です。

(岡田) 私は島(利尻)に行ったのは2008年。携帯トイレの取組みは2000年からで、私の認識が甘いところがある。苦労した所を知らないのです。

(愛甲) よく分からないが、5年間の(携帯トイレ)無料配布期間で課題を克服したからでないか。

(利尻富士町：住吉) 導入当時の詳しい話は前任から聞いた話しか知らないのですが、6年目の携帯トイレ有料化にはあまり抵抗がなかった。利尻の観光客はH15をピークに右肩下がりが、登山者1万人前後はあまり変わっていない。宿泊業者さんが登山者を大切にしてきた意識の高さがあったのかも知れない。

(横須賀) 私は山のトイレを考える会の会員でもありガイドですが、利尻島にはガイドが居なかった。なぜなら登山時季が7月、8月と短期間で食べていけない。だから定住できない。けれども屋久島は1年中ガイドができる。それでたくさんのガイドが屋久島に流入した。そうするとライバル意識とか客の取り合いになって、なかなか自分達が外の人と連携して良いことをしようと言う気持ちに結びつかない。まして、自分達の利益になるものでないとやっていかない。利尻は携帯トイレ1個あたり85円の利益があると言うのが宿泊業者さんの協力を繋いだ。屋久島は利尻より比較にならないほど登山者が多い。泊まる場所がなくトイレには2時間並ぶ。トイレの溢れ方がメチャクチャですから早く携帯トイレを導入しないと解決できないのではないかと思っていた。利尻島はお客さんからの反響が凄く大きかった。私が携帯トイレを使ってくださいと言う前にお客さんが東京から買ってきていて、利尻は携帯トイレを持たないと登れないのだよと言われた。以前はいくら言っても反応がなかった。この噂を流したのは誰なのかなあと。

(4-4) 日高幌尻岳 稲垣悦夫氏 (幌尻山荘管理人)

[質疑応答]

(仲俣) (バイオトイレに) そば殻を使っているのですが、年1回取り替えているのですか?

(稲垣) 菌床がダメになったので、3年間で何回も取り替えています。

(仲俣) 掻き出しは簡単にできるのですか。

(稲垣) 簡単ではないです。上の方の点検口からしかできないので、大変苦労します。

(仲俣) 管理人さんがするのですか？

(稲垣) 業者さんにやって貰っています。

(岩村) 管理人さんから見て、幌尻山荘バイオトイレは処理能力が全く足りなかった。80人～100人はOKと言いながら、稲垣さんの想定だと1日2kg、僅か10人。メーカーの悪口を言う訳でないが、80～100人がウンコしたとしても、とてもじゃないが足りないということですか。

(稲垣) 選定した時、それで決定したと言う。毎年三者協議（業者、山荘、役場）をしているが、現場の方が困っていると言っても「どうしようもない」と言うことです(憤慨)。

5. ディスカッション

(コーディネーター) 山のトイレを考える会 愛甲哲也

(日本山岳会：長谷川)

いつも思っているのですが、山のトイレを考える会は一生懸命頑張っているのですが、行政の方へのインパクト、圧力のかけ方が足りないと感じている。山岳会もみんなで役場に押しかけるとか、少し過激な活動をしてもいいぐらい深刻な問題。特に幌尻山荘は、行政は何を考えて作ったのか、しかもまだ使おうとしている。なぜ改善しないのか、我々は疑問を感じる。山トイレ会でこれだけ討議をしている訳ですから、その結果を幌尻山荘の管理人さんだけに負担をかけないで、我々も圧力をかけては駄目でしょうか。

(岩手大：柴崎)

屋久島もバイオトイレを導入して、うまく稼働しているのは1/3、繁忙期には全部ストップ。現場レベルでは分かっているが、なかなか報道されないのが、屋久島ではいろいろな企業が入って、いいことをやってくれているんだなあ、と外の方は大体思ってしまう。現場の声を計画段階から、いろいろな人の意見を聞いて作るかどうか重要。事業が出来たり、具体的な問題が発生した段階で様々な協議会が作られているのが現状。問題が起こる前にこの山をどう管理するのか話し合いの場を充分持たなければならない。バイオトイレは非常に高価なので一度作ってしまったら、駄目でしたとは言いがたい。

(愛甲)

滝澤さんからもあったように協議会が行政だけになってしまう。使う人の声、管理人の声が反映されていない。幌尻も予算のからみがあって行政の方が短期間で作ってしまった。結果、うまくいっていない。利尻はどうなのでしょう。

(環境省北海道事務所：藤森課長)

今日はプライベートで来ている。私はH20年秋、札幌に来てあまり詳しいことは分からないのですが、利尻山登山道の荒れ方が酷いので、緊急処理的に修復整備しなければならないと走りだした。登山道整備だけでは、なかなか持続的な利用は難しいのではないかと、そんな観点から利尻山の利用のあり方について、地域の山をよく知っている方を交えて議論し答えを出していただこうと、H20～H21年の2カ年に亘って検討会を行った。その時に島の人たち、登山をする人、私達のように公園を管理する者が議論した。ソフトハード両方あわせて進めていく必要があると思っている。

(環境省稚内自然保護官事務所：千田)

利尻は携帯トイレ、利尻ルールなど取組的は先進的。宿泊業者に説明会を開いて普及啓発を行っている。その母体となっているのが協議会。単なる事業説明とかグリーンワーカー事業の受け皿になっていただけで、なかなか利尻をトータルに一体的に考えて対策を話し合う場、体制があまり確立されていなかった。登山道の崩壊も行政の責任と言われるけど、行政だけで守られるわけではなく、地域の力がないと登山道も守れない。協働型の維持管理体制を作るために、どういったことができるのか、山のエキスパート、地元の人々の意見を聞きながら、ハードよりソフト（お金をかけないでできること）が一番効果的で持続的な対策になると考えている。環境省が検討会を立ち上げた。その後は協議会事務局に移し地元が主体になって考えていく枠組みにしていけばと思っている。

(横須賀)

行政で分かっている方がキーマンになっていただけると、いろいろな人が関わりあい、現場の意見が吸い上げられる。それが改善に結びついたり、社会啓発、普及事業に結びつく。偉い方の会議だと現場の声を生かす人が参加できない。どうしても事業を遂行する人たちが沢山いらして実際の問題点がどこにあるのか分かって

いる現場の人が意見を言う機会がない。何か決まれば現場の人がそれに従って動いていく訳ですけど、その意義や方向性を理解しないと全く協力できない。一般登山者も協力できない所に置かれている。だから現場の人を必ず会議に入れて欲しい。けれども現場の人を会議に入れるためには、山岳会、NPOとか夏期シーズンは山に登っている。ガイドは稼ぎ時。その様な時期を極力外して欲しい。行政の方々は山のトイレ会があると分かっているのですから、何かあった時お互いに情報共有しましょうよ。行政から声をかけてくれないと協力も難しい。行政はもっと門戸を開いて欲しい。

(長谷川)

行政機関、担当者が専門家と言うのは極めて少ない。しかも小さい役場でさえ隣りの人の仕事に協力しない閉鎖的な所がある。このような会は最高レベルの人が集まってきている訳ですから、この問題を単なる担当者だけにお願いするのではなく、組織として行動してはどうかと考えています。これだけの人が英知を絞って、申し入れをして、きちっとした対応を整えていかないと、地元だけに我々登山者がおんぶに抱っこしてしまう。美瑛富士の問題も、今だに解決されないのも、美瑛町という小さな町で処理しきれないでいると思う。しかし我々が意見を出したり、いろいろな組織、団体からの意見を纏めて提案型の係わり方を考えて進めていっらどうかと思う。もう11回もフォーラムをやってきていますので、行動する山のトイレを考える会になっていただきたい。

(愛甲)

昨年の6月に仲俣さんと(私とで)美瑛町役場に行って、役場の担当者と話をした。すぐにどうこうする話にはならなかったのですが、携帯トイレでもいいのではないかと、登山口に仮設トイレを置けないかなどを話した。旭川中部森林管理署にも行った。登山口の入林者名簿が代表者の名前と住所を書くだけになっていたもので、表大雪のように人数、登山ルートのほか美瑛富士避難小屋に泊まるかも記入できる様式に変更を依頼、了承してもらった。利尻はみなさんの顔が見えて話がしやすい。大雪は関係者が多すぎて集めるだけでも大変。会議をするのに日程調整だけで大変。

(環境省上川自然保護官事務所：谷垣)

大雪は範囲も広く、自然保護官事務所も3箇所で行っている。関係市町村も多い。ルートも複雑。それぞれの問題を把握して、どう対策をするか細分化してしまっていて大変というのが現状。今年度から大雪山のトイレ実態調査、登山道の調査を考えている。今後、どういう体制で、どうゆう人達が関わって、どうゆうふうを集めて、維持管理をしていけばいいのか、どこにどのような物が必要か、誰が何をするのかを検討していきたい。いろいろな課題が山積している中で、今さらそんなところから検討するのかわかれるかも知れませんが、連絡会議みたいなものから検討していきたいと思っています。

(愛甲)

最近の美瑛富士の状況と、山岳会として長年管理に携わってきた内藤さんをお願いします。

(美瑛富山岳会：内藤)

2004年に美瑛富士清掃登山をしていただいて、その後署名をしていただいて順調に進んでいるなどという感じはしていたのですが、設置した後のトイレの管理を美瑛町と山岳会の方で可能か打診があった。今も私達は管理をしない訳でないですが、山岳会も未来永劫毎週管理に行けるかと言われれば位置的なものもあるし、ちょっと厳しい。美瑛町も厳しいという回答をしている。この夏に意見交換と言うことで愛甲さんと仲俣さんが来てくれたのですが、地元からトイレを建てて欲しいという要望が上がってきていないことがある。確かにトイレを建設して欲しいというのは地元の登山する人間はみんな思っていました、現実的には要望を上げていませんね。ですから長谷川さんから言われたように、地元の美瑛町は自然環境の保全とか山に対して認識が薄いのではないかとというイメージがあるかと思いますが、環境省の方も来ていますので、一つルールについてお聞きしたい。一昨年十勝岳避難小屋が壊れたものですから、森林管理署が資材を提供して、美瑛町が建築の工事代を負担して建てた。結局は後の管理とかあって林野庁の財産。もともとは北海道営林局で建てたものですから、国の財産になった。国の財産に対して、地元がお金を出したり、その後の補修をすることになると、地方財政法というのがあって法律違反になる。そうするとトイレを国が建てたものを地元が管理するというのであれば、地元に移管するということですか？ 山岳会では10年くらいは何とか維持管理はできるかも知れませんが、その後は保証できませんので、今はできませんとの回答にします。町の方は将来的に貯留式みたいな形になって、仲俣さんのトイレ案では10年は持つだろうとの事でしたけど、10年経った時に町が屎尿のへり搬出をしなければならなくなるとの認識がある。

(環境省北海道事務所：藤森)

一般論としましては、国の施設の維持管理を地域の団体に一部お願いする方法は、環境省としてはある。管理の一部の運営委託として可能である。町の方ではどのような管理の仕方を想定されているか把握していませんが、それなりのやり方はあると思う。特にトイレ設置だけで済まなく、日常的な維持管理とか、し尿処理そのもの、仕組みがちゃんとなっていないと、どこかトラブルが起こる。今年度、登山利用に関わるトイレ、基礎的な調査を実施する予定です。現状把握、課題は何なのか、大雪国立公園の登山利用にどういう所がどんな形で関わっているのかが分かるようにして、できれば関係する所と共有化しながら、課題と解決方法について話あっていけるようなことを念頭に置いています。

(愛甲)

建てるのは簡単でも、その後の維持管理は難しいと言うのは何回もフォーラムで話をしてきた。十勝は壊れて新しく避難小屋を造ったのですが、忠別、ヒサゴもここ数年、建物が劣化してきている。これらの建物は大体30年位経っている。新聞報道にありましたけど羊蹄山避難小屋も老朽化、来年度補修します。地域、町、山岳会の意見を聞いてどう連携をとるか話が出ていますので、誰か現状の話をしていただけますか。

(後志支庁環境生活課：柏崎)

羊蹄小屋について明言できることは、今無いのですが、新聞報道のとおり来年度補強工事をする予定。環境省さんの方で早めに検討して頂くとの基本的なことは決まっている。ただ、その時期とか、どういう規模、どのくらい予算で、とかは決まっていない。

(道自然環境課：土屋)

このフォーラムには去年も参加していますし、前任もずっと参加してきました。先ほどから行政への批判も少し頂いているようですが、こういう所から情報を得て、できるだけ改善に取り組んで行こうと思っている。羊蹄山避難小屋は去年の11月に現状調査をして老朽化の酷い所を把握して、新年度明けてから補強をしようとして支庁と相談しながらやっている。簡単に行ける場所ではないので、ヘリで資材を運んで、立地条件も劣悪で経費も相当かかります。登山の最盛期であることを考慮して、地元の人と協議して、できるだけスムーズな工事ができるよう進めている。

(藤女子大・特任教授：小林)

私はサハラ砂漠のニジェールとかマリとかの国で水の安全とトイレをどうするか関わっている。特にメンテをどうするか、その費用をどうするか、ドナーの国から援助され国有財産となったものをどう維持管理するのか、住民組織としてどうそれを作って金をどう捻出するのか等、フランス語圏アフリカの国の官僚と議論していますので、大変興味深く聞かせていただいた。今の最後の課題について(私の感想では)道庁は大変お金が厳しいので、それは道の仕事だと言ってもおそらく10年はかかると思います。地方自治法が改善されて、公設の施設もなるべく民活で運営する。札幌の体育館でも指定管理者制度で民間の組織で維持管理してもらっている。したがって山のトイレを公設公営か公設民営か民設民営でいくのか、そろそろ考えなくてはいけない。今回聞かせていただいて私が二つ気づいた点があります。これだけ自然と山を良く知っている方がなぜトイレの問題をあんなに技術依存の装置に100%処理できると思いついてるのかと不思議に思った。実はウンコは体内で消化吸収、分解しやすいものを全部吸収したあげくの非常に安定した有機物がウンコとなって出るわけですね。これはバクテリアにとって大変分解しにくいものですね。まず簡単に対応できないのです。どういうものを食べているかによってウンコは違う。このごろは食事の洋風化で下水処理場の微生物は変わった対応をせざるを得なくなっている。なぜ都会でちゃんとウンコしても川が汚れないように処理できているのか、その不思議さにも、皆さんよく気をつけていただきたいと思います。分解が非常に難しい。その上オーバーロード、量の変化が大きい。普段はえさが来ない時期がズーとあって、来たと思ったらワァ〜と来る。これにはまず対応ができない。北海道では50℃以上の温度にすることによって回虫とバクテリアを全部殺すと、それでオカズにまみれたものを畑に使えるようにすると言うのを装置の基準にしているために、あれだけ気温が低いところで発電機やなんだかんだとセットしているわけです。水力発電機が壊れた、風力発電機が壊れた、壊れるのが当たり前でしょう。それなのになぜ機械物を買って付けようとするのか大変不思議に思っていました。それで非常に安定有機物であるウンコはやっぱり背負って降りてくる方々によって守られていることが分かりましたが、利尻で非常にうまくいっているケースを見習って、どうやったらそれ以外の地域でも利尻の様なことを実現できるのか一番大事な点だと思います。もう一つは利尻で一袋80何円だから、継続性のために利益が出る必要があると。あれを全て処理しているのは利尻町です。利尻町は町民がコンスタントに使う水

のほかに、夏になると観光客や登山者が来てデカイ施設が必要なわけです。水道の方は火災が重なると困るのでキャパがありますけど下水道、し尿処理場は6月末から大変えらい事になるわけですね。その観光客が来ることによって増える費用は利尻町が負担しています。みなさんはこれを当然と思っていると思いますが、これも原因者負担ということからしますと、ウンコを出した人が処理費まで負担すべきだと思います。日本に根付いていないのがキャリングキャパシティという環境容量という概念であると思います。日本ではどこでも装備なしで歩いて、どこにでも行けるから人数制限というものが無い。スイスアルプスでは、外へ出たら凍え死ぬからともかくロープウェイで登った人間は展望台から出るなど限定されます。日本でも上高地ですが数が決まっている所がありますね。私は数日前にエジプトから帰ってきたのですが、ピラミッドに入る人数を300人、ツタンカーメンに入る人を300人に制限しています。理由は吐く息の炭酸ガスで石灰石が劣化するという訳です。300人に制限してワイロをやって闇で出る切符も100枚と制限しています(笑)。制限して遺跡を守る。利尻島は東京ではみんな携帯トイレを持っていかないと登れないそうだよ。そのトイレは1日300枚限りで限定する。日本では限定しないという前提で手稲のスキー場も渋滞すれば、何時間たってもスキー場に辿りつけないからニセコに分散するんだと言う。非常に無責任な体制にあるわけですね。誰にでも何処の山にでも行けると言うのは非常にいいことですが、それを放置しておいては自然が守れないという状態になった時、やはり何らかの人数制限、キャリングキャパシティ、アメリカはこれも色々な町でやっています。これ以上人口が増えると弁護士が足りないとか、下水処理場が足りないとか、電力が足りないとか、上限を決めています。環境と共存して長持ちさせる上での制限についても議論すべきでないかと思います。

(愛甲)

お話の中でもっと民を使えとの事をおっしゃったと思いますが、確かに幌尻の話にしても黒岳のトイレの話にしても、導入する時に検討されているのですが、なかなか外から意見を出したりするタイミングがずれていたり、上手く行っていない。逆にこういうことをやっていたら？と思ったりすることもあります。民間の企業の方にもできれば、そう言うことにも参加してもらえれば。最近そう言うこともかなり進んできて、一つの良い例だと思いますが、我々が配っているマナー袋、あれは(株)ムッシュさんの売上の一部を使って、無償で当会のイメージを入れていただいて配布しているのですが、そういう貢献をして頂いて、それが環境改善にもつながるし、それで山に登る人が楽しく登れば、ムッシュさんの売上も上がるとなれば、理想かなと思うのですが、実際に売上に結びついているかどうか？ムッシュの西村さんどうでしょうか

(ムッシュ：西村)

大阪で登山ウェアを製造していますが、税収が下がっているんで、地方行政もお金がないので大変なのですが、僕たちがもっと頑張って税金を納めなければならぬのは分かるのですが、なかなか厳しいですね。これがマナー袋です。ムッシュの名前を入れています。これを山で無料で配布すると税法上でもなかなか難しい事があり、いろいろ苦しみながらやっています。民間企業として利益を出して、こういうことをさせて頂きたいとの強い思いはあるのですが、問題は二つあります。一つを日本の民族性みたいなのがあって、良いことを大きな声で大袈裟にやると、どこからかスタンドプレーだ、偽善だと言われる。特にネット社会だと変に批判されてしまう怖さを持っています。良いことはこそとやらなくてはいけないとの感覚が日本にはあるなあと個人的に感じます。もう一つは民間企業は僕みたいな零細企業は厳しいですから、毎年安定した収益が取れないということで、多量に作れないという二つの問題がある。けれども皆様の活発な議論を聞かせて頂き、我々も何とか頑張って沢山商品売って、少しでも皆様のお役に立てること、山が綺麗になって、山にたくさんのお客様が安心して来て頂ける環境を作ることに少しでも協力させて頂きたいと思います。

(愛甲)

未組織の登山者にどうやってメッセージを伝えるかという課題がある。以前は山岳会とか通していけばメッセージが伝わっていったのだけど、最近は若い人が増えているのではないかな。そういった人たちにメッセージを伝える時に企業との関わりも重要という感じもしますが、この辺で滝澤さんのようにガイドをしている方は実感としてどうなんでしょうか。お客様の層が変わった、若い人が増えたというのはあるでしょうか。

(滝澤)

先週、23歳の女子大生3名のガイドをしましたが、昨年はいなかったのにまた景気が回復してきたのかなと思います。今回、宿泊施設をやっている純粋にガイドとは言えない人がアンケートをした時の話ですが、お客様の中に携帯トイレを持って帰る人がいるそうなんです。ただ、中には持って帰ってきて分からない人もいます。どうもやっぱりコソコソと隠すと。やっぱりトイレだからと。これもっとファッショナブルにかっこ良

く、良いことをしているのだぞと、もっと見せて歩けるような商品にカバーとか色とかを作ったらどうなのかと言う提案がありました。私なんか携帯トイレスタート時に防水バックに入れザックに入れているのですが、こんなのにだってメッセージを入れる、今出ていますサニタリーバックはザックの横に付けるものがありますね。こんなにも携帯トイレのメッセージを入れて「携帯トイレ使っている、やるじゃん」と思わせるような仕組みもあっていいのかなと思いました。若い人達、未組織の部分でいうと確かに増えていると思います。羅臼岳の登山者数が減っていますのは百名山ブームのツアー登山も減ってきて、だんだん個人の中老年グループ、団塊の世代ですね。また、若い人も中老年もみんなインターネットを見ている。中老年の登山者は同じルートを辿って、同じ店に寄って、同じものを食べて、同じ宿に泊まります。木下小屋で夜、3日3晩、別な人が全く同じ言葉を聞かされるんですね。インターネットをうまく使うのが必要な。若い世代にはファッションナブルに、アウトドア系の雑誌でもファッション誌みたいな山雑誌が2冊出ている。「荷物が重たくなるが気持ちは軽し」というキャッチフレーズでもいいかなと。ムッシュさんではそういうお洒落なマナー袋を作りませんか。一般の女性雑誌でもウオーキングとかハイキングの特集が生まれ始められていて、その辺をうまく使うという話ですよ。

(岡田)

利尻ルール、ローインパクトで登るためのルール。この情報をインターネットだけでなく、雑誌とかパンフレットの改定の際に役場の観光課の方に連絡が入るんですね。その時は必ず改定する時はその情報を載せてくださいと言い、どんどん新しくなる毎に増殖してくることになる。利尻ルールの認知率が70%と高い。あと、あり方検討会の議事録なども流している。これから、利用者数のデータ、登山計画表の分析、登山カウンターの分析、なども流す予定です。

(愛甲)

混雑予報も出していますよね。あれは何時からでしたか。狙いは？。

(岡田)

スイスイカレンダーというのを去年から出している。混雑予定カレンダーですね。混雑というのは毎年決まっている。間接的なニーズコントロール、不快なことを避けることを狙いとしています。

(愛甲)

間接的なコントロールの例ですけど、先ほど小林先生がキャリングキャパシティの考え方、直接的に人数制限をするというのが山の話をしていると出てくるんですけど、屋久島でもそういう議論をしていますよね

(岩手大：柴崎)

屋久島はエコツーリズム推進法に基づいて全体構想を作っていて、それをもとにたたき台としては1日430名位縄文杉ルートを上限として規制をかけようという話になっています。430名の根拠が縄文杉のデッキのスペースからであったり、その周辺の小屋のキャパシティだけで決まっているのですから、利用者の混雑に対する自然への影響を科学的に踏まえて出した数字ではないので、私はどちらかと言うと原生的な自然の方が好きだと思うんですけど、初めて屋久島に入って縄文杉に登った頃というのは多分1日1000人行くか行かないかと思う。それ位で丁度いいなあと思っていたのですが、今から10年前で430を越える数字は殆ど無かったです。ところがこの数年、非常に多くなって1日1000人近くになったので430人ということにしているのです。その数字が妥当かどうかというのは少し議論をしなければならぬと思う。ただ、一つ問題なのはエコツーリズム推進協議会では、町民を対象にヒヤリング調査をしているのですが、屋久島の人口は1万4千人いるのですが、声かけが悪いのか、町民がしらけ切っているのかよく分からないのですが、15人とか20人とか、酷い時には10人を切ります。言っても何も反映してくれないとか、山は自分達とは関係ないと言う人も多く、結局ガイドさんとか観光業者の話だけになっていて、できるだけ数字を大きくしろと圧力がかかる。数字を下げた方がいいよと言う話はなかなか出てこないのです。形式上は住民参加型の管理形態をとっていますと行政側は言うと思いますが、しかし、それを細かく見ていくと極めて形式的な住民参加型の管理になっていて、欧米の住民参加の研究者からすると避けるべきであるという状況にどんどんなる可能性があります。私も〇〇レベルで座談会を開こうと計画しているのですが、なかなか行政と観光業者でない地域住民の声をいかに反映するかの仕組みがあまりにもなさすぎるので、どうしようか悩んでいる。正直言って北海道というのは何か問題があると何かみんなが集まる場所だなあと改めて思って、すごく感激しているんですけど、北海道のこのやり方を屋久島に持っていくとそのまま使えるかどうか微妙だなと思って話を聞いている。報道では規制の話が進んでいるように思われますけど、科学的な根拠は非常に乏しいということ。それに対し

て極めて本当の意味の地元住民がさめている現状があること。中には何で自分達が今まで水汲みに行けたのに、シャトルバスに乗って行かなければならないのかと言う声も出ているのですが、閉鎖的な社会で表面上は言えないという状況は陰であると思う。

(愛甲)

全く同じ話が知床にあります。科学的な根拠をどう作るかというところと、トイレ問題は他の問題と繋がっているんで、全体的に山のことを考えないと、トイレだけで議論していても駄目ですし、それだけで集まっても話が分散します。もう一人高山植物保護に取り組んでいる樋口さんに話を聞こうと思います。それは高山植物の盗掘防止活動の営みやって、かなり私は市民の活動というか研究者なんかも加わって大きく行政を動かし条例ができ、全国的にもとても評価できる活動だと思うのですね。ついこの前小野先生とお話をしましたら、やはり高山植物の盗掘だけでなく、もっと広げて山岳環境全体を考えるような場も作らないといけないねとおっしゃっていたので、その辺を少し宣伝も兼ねて樋口さんお話をさせていただきますか。

(樋口)

108Pに「自然保護の裏方として」を書いたのですが、高山植物盗掘防止ネットワーク委員会（以下 高盗防）の事務局を長年（4年）たった一人で事務局長としてやっていました。高盗防は全道各地の山岳団体、自然保護の市民団体などのグループが50団体集まって作りました。なぜそのようなネットワークを作ったかという高山植物の盗掘が夕張岳とかアポイ岳とか大千軒とかいろいろな所、各地で起こったんです。夕張岳で1988年だったか270株の盗掘が起きて、それが新聞に出ましたけど、それが主婦2、3人が盗掘して捕まった。採ったものは元に戻せないんで、大変なことだと夕張から声が上がったのです。そうしたらアポイの方でもヒダカソウが絶滅寸前だという声があがり、大千軒でもホテイアツモリソウなどの貴重な植物が盗掘されていて、独自に福島町の「青い山脈」という市民グループがずーと平日に交替でパトロールをしていた。それで全道的な組織にしなければ駄目だねということから高盗防ができた経緯があります。それで道条例が出来たり、東京に行って法務大臣に訴えたり、署名を集めたり、いろいろなことをしました。それで盗掘も無くなってきた。盗掘をする人はインターネットで情報を調べるんですね。山のトイレを考える会はHYMLが主体となって出来た会ですけど、HYMLでもルールができて、どこどこに貴重な高山植物があったなどの情報を流さないようにしようと申し合わせをした。情報も注意しながら流さなければならぬ状況になってきます。その中で様似町のアポイ岳ファンクラブ、市民グループと行政が連携をしながらやってきたことが凄く勉強になった。行政と手を繋いでやっていかないと何も進まない。ユウパニコザクラの会も夕張市とけっして仲が良いわけでもないのですが、夕張岳は夕張市の財産であることを知らしめた功績はすごく大きいのではないかと思います。委員長の小野先生は地域の人達と連携することにとっても一生懸命だったこともあって、10年間を振り返り、盗掘防止という名称も変える時期だねと4月の総会で「高山植物保護ネットワーク委員会」という名称になるかも知れません。それと利尻の方に一言お礼を言いたいと思うのですが、利尻ルールというのは素晴らしくて、利尻富士町に資料を送っていただきたいと言ったら、翌日に50部送っていただきました。そういう意味でも地域の力と行政とが上手くいっている良い例ではないかと思います。雨竜沼湿原を愛する会と行政も雨竜沼ルール？を作っている。トイレ問題もなかなか難しいと思うのですが、もう少し行政とどこかで話あえる場があったら良いなと思います。大雪は広すぎて難しいと思うのですが、工夫をしていけたらなと思います。

(りんゆう観光：植田)

11回目のトイレフォーラムと言うことで、私はりんゆう観光、大雪山層雲峡黒岳ロープウェイで仕事をしています。山岳ガイドをやったり、日本山岳会北海道支部に所属、NPO雪崩研究会、万計山荘友の会の会員もやっています。このフォーラムが立ち上がった当初よく参加した。当初、随分、愛甲先生と上川支庁の担当課長さんを天敵のように噛み付いた記憶があります。それからいろいろ愛甲先生たちの努力で、山のトイレを考える会の方々の気持ちも理解できるようになった。さきほど愛甲先生が10年やってきたことが、どのような成果に結びついているのだろうか、この先何を目指すのだろうかとの話もあったのですが、継続は力なりかな。やはり地道な活動を継続することによって、いろいろなお話を共通のベースでできるようになったと言うことで、これは大変素晴らしいことだと思っている。そういった活動をいろいろな形で継続して欲しいと思っています。携帯トイレの問題で話が出てきていますが、素晴らしい先進事例が利尻である。携帯トイレは携帯トイレで素晴らしいものだと思います。もう一つ私は山岳ガイドをやっています。ヨーロッパアルプス、カナデアンロック、ニュージーランドのミルフォードトラックとか、いろいろな所に北海道の方々を何千

人もご案内してまいりました。施設は施設で素晴らしくいい。携帯トイレの重要性も大事だが、もう一つは財政的にこういう時代ですから施設をよくしろと言うのはなかなか難しいと思うのですが、施設もやっぱり充実することへも力点を置いていくことも大事であると思はる。ですから両面をうまく機能させていくかを考えていく必要があると感じました。

(愛甲)

今日は、どのように行政と連携をとるかがキーワードだったと思います。総会で事業計画を説明したのですが、その中で黒岳のトイレについて、今年、我々も何かお手伝いできることはないかということで、山岳トイレの実証事業に関わる専門家の方とかをお呼びして、黒岳と一緒に登って、みんなで改善検討会をしようというようなことを計画しています。できればそこに行政の方とかも一緒に行ってもらってやりたい。出来てしまったことをどうこう言うことではなく、何かもっと改善するうまい方法はないか、他の道内のトイレに生かすことができないか、勉強する場を作っていきたいと思はる。役所の方も今日、たくさん来ていますけど、うまく実現できればなあと思はる。最後に岩村代表から締めてもらいます。

(岩村)

長谷川さんから言われた時、私がすぐ答えるべきだったんでしょけど、長谷川さんの最初の発言は「山のトイレを考える会はもっとしっかりやれよ」との叱咤激励と受け止めています。私は横須賀から代表を引き継いだ訳ですけど、正直言ってトイレ問題の難しさというのは、当会でもいろいろ人によって考え方の違いがあります。まして山のトイレは一括りに括れない。幌尻山荘のトイレと黒岳のトイレは当然違うのだろうし、まさに愛甲さんが言っていたように、山のいろいろな状況に応じた山の楽しみ方とか使い方を含めてですね。山のトイレを考える会として、もっと圧力団体的なものになった方がいいのか、これも議論の分かれるところです。私は圧力団体になったら、この会場にみなさんが来てくれないのではないかと心配しているわけですね。この場で環境省さん、あれだけ署名を出したのにどう答えてくれるのですか、前の会合の時にはちょっとそんな話をしましたけど。私の考え方は、圧力団体になるのではなく一緒にとにかくやってみよう。目標とするのは圧力をかけることではなく、北海道の山をよくするのが私達の目標であって、けっして誰かを問い詰めるとか、そういうこと自体が山のトイレを考える会の役割でないと思はる。そういう面で、皆さんから見たら、少し歯がゆく感じられる面もあるかも知れませんが、是非、そういう方向で基本的に、これからも町の方、道の方、国の方、お役人の方含めて、どうしたら北海道の山をよくできるのか一緒に考えてやってみようと思はる。ただ、困るのは、いろいろと投げかけた時に役人言葉で「じゃ、善処しておきます」と言われると、出来ないことなんだと思はるのも困るんですけど。できれば是非、環境省やほかの方からも「実はこんなことを考えているんだよ」と逆にこちらに前もって投げかけてくれれば「あつ、そうか、前に言ったことがちょっと進んでいるんだなあ」と大変ありがたく思はる。今日、小林さんがおっしゃっていたキャリングキャパシティですが、非常に示唆に富んだ考え方で、なるほどなど。入山料はある意味でキャリングキャパシティに近いような感覚ですよ。入山料を取るんだったら行かないという人もいますし、勿論、いくらに設定するかによりますけど。スイスあたりの話をされていましたが、日本にはなかなか文化の違いというか、歴史の違いがあるので。例えば、今すぐ日本で大雪山に5千人しか登らせないとすると、これもまたロープウェイで人を運んで食べている人とか、地元の旅館の方とか、もしかしたら航空会社の方が北海道観光としては人が少なくなるから困ると言われるだろうし。考え方としては非常になるほど思はるんですけど、なかなか一朝一夕に進む話でないと思はる。ただ、長い目で見て。もし本当にそういうことが必要だったら今のうちからでも、そういう考え方を打ち出していった方が、すぐにできなくても5年後、10年後には、あたりまえだよ。入山の制限をするというのは今のうちから北海道でも議論しておく必要があるのかな。結局、山のトイレを考える会、なぜ僕なんか。やってみようと言ったと言ったのは、一局集中ですよ。1週間に一人ぐらいしか登らない山で、誰がどこでウンコしようが、紙を捨てようが、問題にならないと私自身は思はる。ただ、どうしても集中する山には、特に北海道の場合は、2~3カ月に人がどんと来る。特に百名山中心になるわけですから、そういう面からすると入山制限は一つのやり方かな。ただ、入山料をとる、そのやり方をどうやってするかが非常に難しい問題なのです。利尻みたいに登山口が2つしかない所は、もしかするとやり易いかも知れませんが、大雪みたいにかなりの数になるところもあるし、言いは易し行は難しで簡単にいかない。ただ本当に必要ならば、今から環境省あたりが音頭をとって議論をやるのも必要かなと思はる。

(記録：仲俣)